第５章　子育ての物理的環境

松本　聡子

子どもを育てるうえで居住環境という物理的な環境は重要な役割を果たしていると考えられる。まず一つの影響関係として、居住環境→子ども（の発達）という直接的なものが考えられるが、これに加えて、さらにもう一つ、居住環境→養育者→子ども（の発達）という間接的な関係についても検討する必要があると思われる。なぜならば、養育者が「子育てのしやすい環境」で安心して気持ちよく子育てができるということは、子どもの成長にとっても重要な要因であると考えられるからである。このような視点から、ここでは居住環境の子どもの発達に対する間接的な影響について考える一つのステップとして、子育てをとりまく居住環境について、育児期の母親の評価を中心に検討をしていきたいと思う。

現在の住居

はじめに、調査対象の家族が０歳児期の現在どのような住居で生活をしているのかを尋ねた結果を**図５－１**に示す。

全体のおよそ半数（51.4％）が「借家で集合住宅」に居住していると回答している。次いで高いのが「持ち家で一戸建て・連棟建て」の23.6％、「持ち家で集合住宅」、「借家で一戸建て・連棟建て」に住んでいる家族は、それぞれ15.9％、7.4％であった。所有形態別に見てみると、持ち家は39.5％、借家は58.8％で、借家に住んでいる人のほうが多いことがわかる。母親の年齢別に住居の所有形態の分布**図５－２**を見てみると、若年層（妊娠時24歳以下）では、持ち家率が27.6％であったのが、年齢の上昇とともに持ち家率が高くなり、妊娠時35歳以上群では63.4％となり、これは全国平均の64.3％（平成17年度　国勢調査）とほぼ同じ割合になっている。妊娠時30歳～34歳の層で持ち家率と借家率の割合が近くなっていることから、この年齢層が借家から持ち家への移行期であることが示唆される。

住居の形態で分類してみると、一戸建て・連棟建ては31.0％、集合住宅は67.3％と、集合住宅に住んでいる家族のほうが倍以上いることがわかった。年齢別に住居の形態の分布のようすを表したものが**図５－３**である。所有形態のように年齢層の上昇に伴う一定の変化は見られないが、妊娠時25歳～29歳の群で、集合住宅に居住している人の割合がもっとも高くなっている（75.4％）ことがわかる。

図5－1　現在の住まい（0歳児期妻）

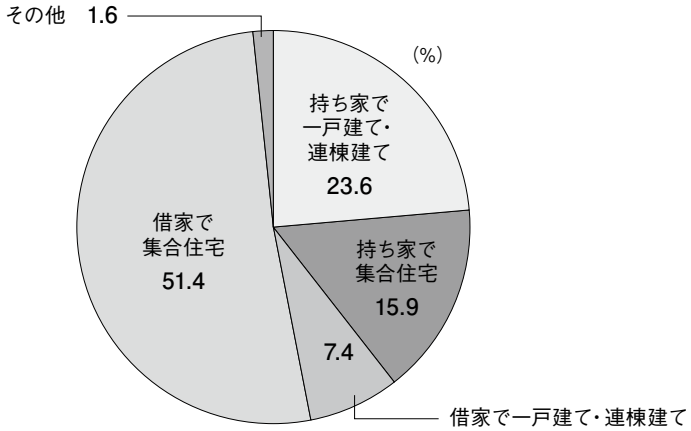
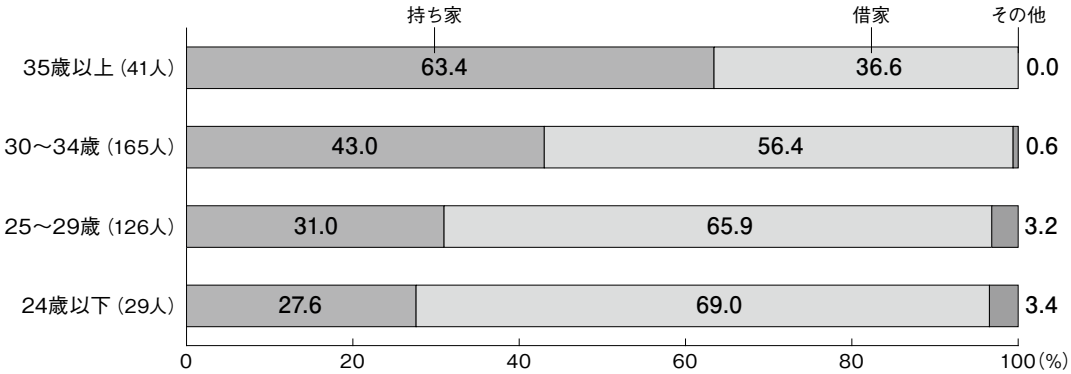
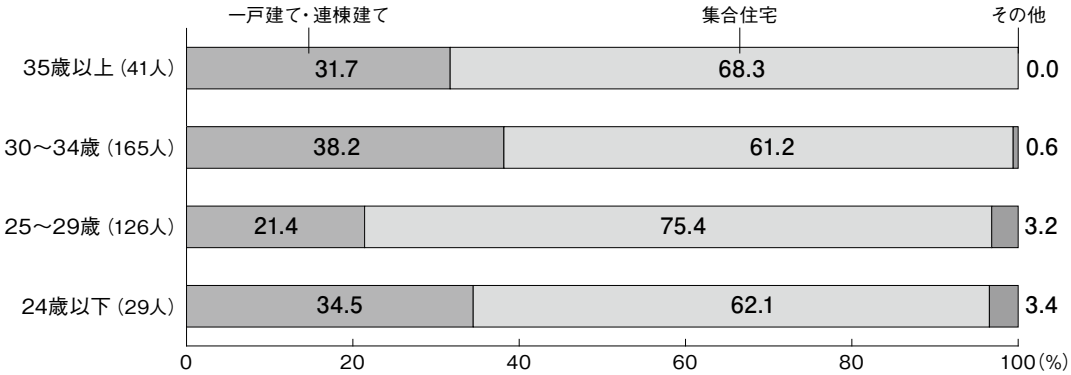


図5－2　年齢別住居の所有形態（0歳児期妻・妊娠期の年齢別）



注1）年齢の群分けは妊娠期の時の年齢に基づいたものである。
注2）妊娠期の時の年齢の「無答不明」は除く。

図5－3　年齢別住居の形態（0歳児期妻・妊娠期の年齢別）



注1）年齢の群分けは妊娠期の時の年齢に基づいたものである。
注2）妊娠期の時の年齢の「無答不明」は除く。

■近所のようす

では、母親たちは現在住んでいる近隣環境を、子育て環境としてどうとらえているのだろうか。徒歩で20分程度の範囲内に「お散歩できるような公園や遊歩道など」「公共の子育て支援施設（保健所、保育所、ファミリーサポートセンターなど)」「小児科や子どもを診てくれる病院」「自分のことを診てくれる産婦人科や助産院」といった施設があるかどうか、また、そのような施設がない場合には、困っている程度も尋ねた。その結果を**図５－４**に示す。

０歳児期の妻で、徒歩20分圏内（近所）に「ある」という回答がもっとも多かったのは「お散歩できるような公園や遊歩道など」(78.3％）で､次いで「小児科や子どもを診てくれる病院」(75.3％）であった。「公共の子育て支援施設（保健所、保育所、ファミリーサポートセンターなど)」(65.7％）や「自分のことを診てくれる産婦人科や助産院」(41.8％）は公園や病院などに比べると、現在の居住地の近所にある人の割合が少ないことがわかった。

図５－４には、妊娠期の結果も併記してあるが、「お散歩できるような公園や遊歩道など」という項目については評価の分布のようすに子どもが生まれる前後で大きな変化はないことがわかる。しかし、「公共の子育て支援施設（保健所、保育所、ファミリーサポートセンターなど)」「小児科や子どもを診てくれる病院」については、近所に「ある」と回答している人の割合が、子どもが生まれたあとのほうが高くなっている（「公共の子育て支援施設」については、妊娠期53.0％から０歳児期65.7％へ8.7ポイントのアップ､「小児科や子どもを診てくれる病院」については、妊娠期61.8％から０歳児期75.3％へ13.5ポイントのアップ)。これらの項目については同時に、「近所にないのでやや困っている」「わからない」と回答した人の人数が減少していることから、実際に子どもが生まれたあと、さまざまな情報を得ることによって、それまで知らなかった施設や病院が近隣にあることがわかったという状況を反映している可能性が示唆される。「自分のことを診てくれる産婦人科や助産院」については、「近所にある」と回答している人の割合が、子どもが生まれたあとのほうが低くなっており（妊娠期49.5％から０歳児期41.8％へ7.7ポイントのダウン)、同時に「近所にないがあまり困っていない」と回答した人の割合も子どもが生まれる前の26.4％から、子どもが生まれたあとの33.2％に増加している。この変化の理由の１つとして､妊娠・出産の時期は､徒歩圏内にないということが困る状況であったが、産後は徒歩圏内になくても，妊娠・出産期ほど困ることはなくなったと考える母親がでてきたことが推測される。

■生活環境の様子：WHO－QOL26の項目から

次に、ＷＨＯ－ＱＯＬ26の項目の中から、物理的な生活環境に関係のある項目（「毎日の生活はどのくらい安全ですか」「あなたの生活環境はどのくらい健康的ですか」「家と家のまわりの環境に満足していますか」「医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか」「周辺の交通の便に満足していますか」の５項目）について、**図５－５**に示した。「毎日の生活はどのくらい安全ですか」という項目は、０歳児期で、全体のおよそ４分の１にあたる24.2％が「非常に（安全)」と回答しており、生活環境に関する５項目の中で最も高かった。反対に、「医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか」という項目に対しては、「非常に満足」と回答した人が、妊娠期で4.4％、０歳児期で6.9％となっており、５項目中最も低い

図5－4　近所のようす（妊娠期・0歳児期妻）

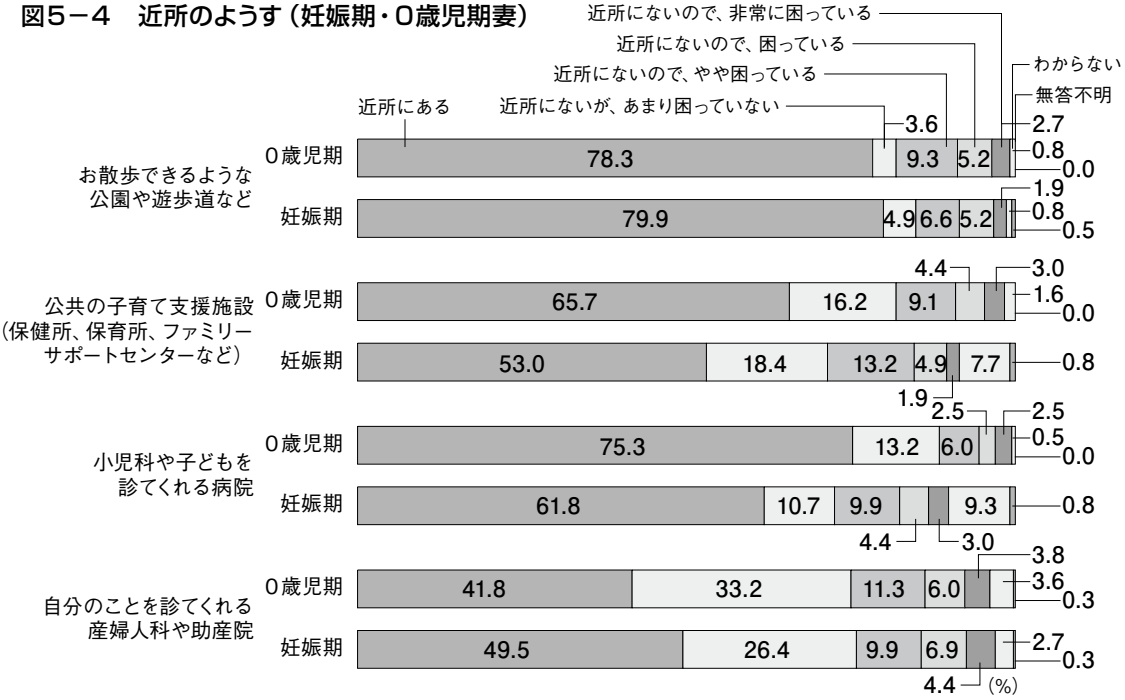
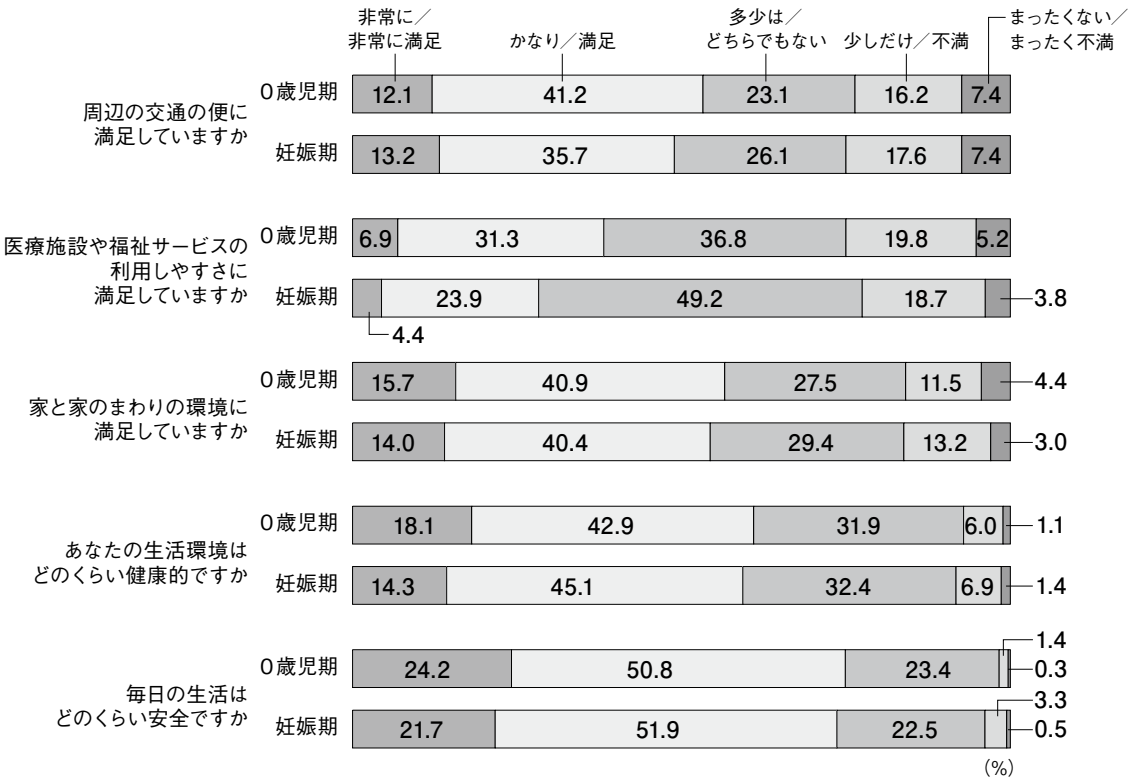


図5－5　周辺環境に対する満足度（妊娠期・0歳児期妻）



割合となっている。

「非常に／非常に満足」＋「かなり／満足」を満足群､「まったくない／まったく不満」＋「少しだけ／不満」を不満群として、妊娠期と０歳児期の様子を比較してみると、生活の安全性や生活環境の健康度、住居や周辺環境に対する満足度は、あまり変化は見られない。しかし、医療施設や福祉サービスの利用しやすさや周辺の交通の便については、子どもが生まれたあとの満足度が高くなっていることがわかる。**図５－４**について、「公共の子育て支援施設（保健所、保育所、ファミリーサポートセンターなど)」「小児科や子どもを診てくれる病院」が妊娠期に比べ、０歳児期のほうが「ある」と回答した人が多いことを指摘したが、子どもを持ってはじめて地域の子育て支援施設・福祉施設の存在やその利便性について意識するようになるという傾向が、この項目からも示されよう。

■住居内の様子

次に、現在住んでいる住居のようすについて検討するために、「住居の間取りの使い勝手が悪く、家事や育児がしづらい」「家の中に子どもが遊べるスペースがあまりなくて苦労する」「自分１人ですごすスペースを確保するのが難しい」「夫婦２人ですごすスペースを確保するのが難しい」といったことを経験したことがあるかどうかを尋ねた。その結果を**図５－６**に示す。この４つの項目の中では、「経験あり」と回答した人の割合がもっとも低かったのが、「家の中に子どもが遊ぶスペースがあまりなくて苦労する」という項目で、全体の31.3％であった。これはまだ子どもの年齢が低く、活動範囲がそれほど広くないため、子どもの遊ぶスペースで不便を感じることが今の段階ではあまりないためと考えられる。その他の項目については、「経験あり」と回答した割合の高い順に、「自分１人ですごすスペースを確保するのが難しい」(55.8％)、「住居の間取りの使い勝手が悪く、家事や育児がしづらい」(44.2％)、「夫婦２人ですごすスペースを確保するのが難しい」(44.2％）であった。

さらに、「経験したことがある」と回答した人に対して、そのことでどれくらい「イライラした」かを評価してもらった。その結果を**図５－７**に示す。「非常にイライラする」＋「ややイライラする」と回答した人の割合がもっとも高かったのは､「住居の間取りの使い勝手が悪く、家事や育児がしづらい」の57.2％で、間取りのせいで家事や育児がしづらいと感じた人の半数以上が、そのことで「イライラした」と感じていることがわかる。「家の中に子どもが遊ぶスペースがあまりなくて苦労」し、そのことで「イライラした」と回答している人は40.4％、「自分１人ですごすスペースを確保するのが難しい」と感じ、そのことで「イライラした」と回答している人は36.5％（いずれも「非常にイライラする」＋「イライラする」の合計）であった。一方、「夫婦２人ですごすスペースを確保することが難しい」と感じたことがある人の中で、そのことでイライラしたと回答している人は18.0％(「非常にイライラする」＋「イライラする」の合計）であり、間取りの使い勝手の悪さによる育児・家事のしづらさや子どもや自分のためのスペース確保の困難さに比べると、「イライラする」人の割合は、低いことがわかる。

図5−6　住居内のようす:経験の有無(0歳児期妻)

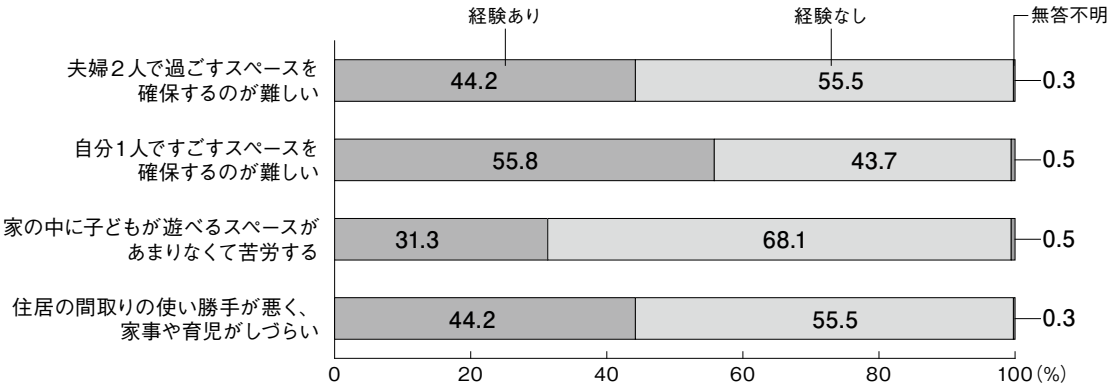
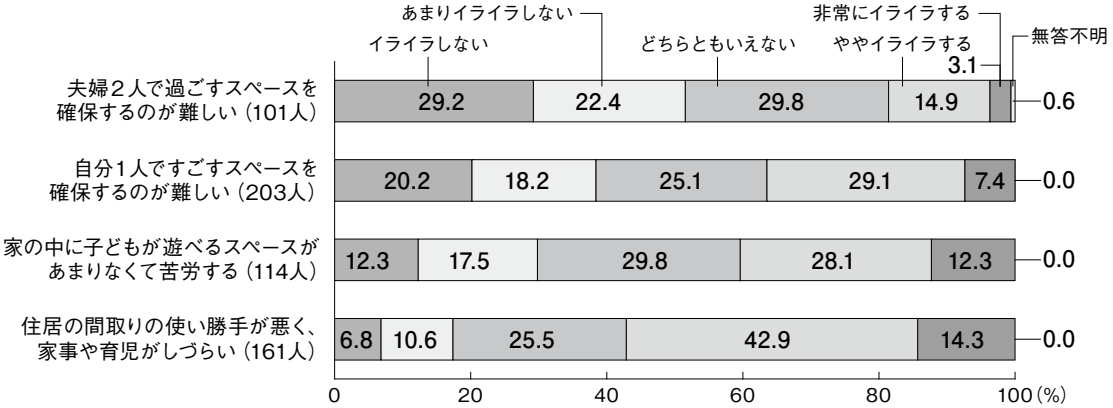


図5−7　住居内のようす:イライラするか(0歳児期妻)



注) 住居内のようすで「経験あり」の人のみ。

■家の雰囲気

ここまで、居住環境の物理的な側面について主に見てきたが、最後に、家の雰囲気というものについて見ていきたいと思う。

住居内の環境を構成しているものには、住居の物理的な特徴に加え、家の中の雰囲気も含まれるだろう。家の中が整理整頓されているとか、気持ちよく落ち着いた住居内の雰囲気といったものは、子育てのための環境の要素として重要な位置を占めていると考えられる。そこで、家の中の状態や雰囲気について、母親がどのように感じているかについて尋ねてみた。「うちは本当にごちゃごちゃしていて騒々しい」「私たち家族はいつも何かにせかされているような感じがする」「うちの家族はいつもばたばたしている」「うちでは邪魔をされずに考えごとをすることができない」という項目に対して、「あてはまらない～あてはまる」の４段階で回答してもらった結果を**図５－８**に示した。

家の中の混乱や騒がしさの程度を示すような項目に対して、「あてはまる」＋「ややあてはまる」と回答した人の割合がもっとも多かったのは、「うちは本当にごちゃごちゃしていて騒々しい」という項目であり（30.2％）、全般的に、「あまりあてはまらない」あるいは「あてはまらない」と回答している人が多いことがわかる。全体的な傾向として、家の中がぐちゃぐちゃで、無秩序な状態になっているような家庭の割合は低く、比較的落ち着いた生活をしているようすがうかがえる。

このような家の中の状態は、住居の物理的な特徴と関係があるのだろうか。この点について検討するために、前出の「間取りの使い勝手が悪く、家事や育児がしづらい」と感じたことがあるかどうかと、家の中の混乱・騒がしさの程度との関係をグラフに表したものが**図５－９～12**である。まず、どの項目についても、「住宅の間取りが悪く、家事や育児がしづらい」と感じたことのある回答者と感じたことのない回答者では、家の中の混乱や騒がしさを示すような項目に対する回答のようすが異なっていることが見受けられる。各項目について、「あてはまる」＋「ややあてはまる」と回答した人の割合を、「住宅の間取りが悪く、家事や育児がしづらい」と感じたことのある人（以下、経験あり群）とない人（以下、経験なし群）で比較してみると、「うちは本当にごちゃごちゃしていて騒々しい」という項目について、経験なし群では22.4％であるのに対して、経験あり群では40.2％であった。同様に、「私たち家族はいつも何かにせかされているような感じがする」という項目については、経験なし群では、19.4％であるが、経験あり群では34.6％であった。さらに、「うちの家族はいつもばたばたしている」という項目については、経験なし群では、「あてはまる」＋「ややあてはまる」と回答した人が15.9％であるが、経験あり群では38.3％と、倍以上になっている。また、「うちでは邪魔をされずに考えごとをすることができない」という項目に対しては、「あてはまる」＋「ややあてはまる」と回答した人が、経験なし群では12.4％であったが、経験あり群では29.1％と、倍以上となっていた。

図5−8　家の雰囲気（0歳児期妻）

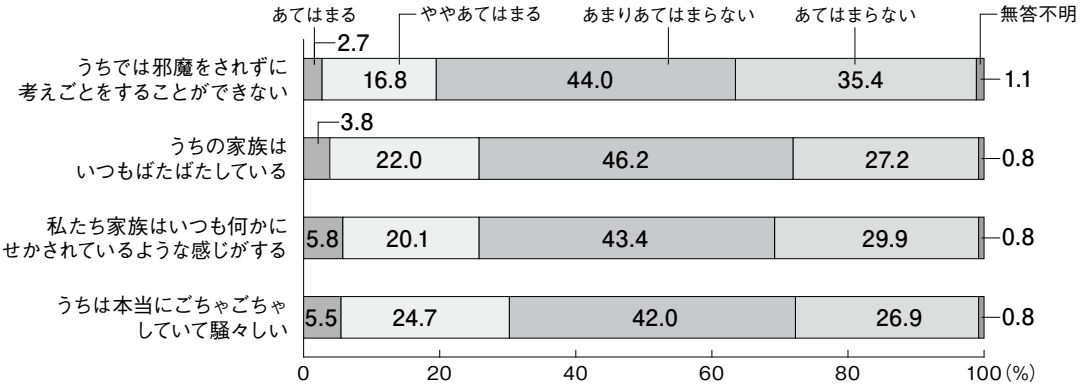


図5−9　家の雰囲気：うちは本当にごちゃごちゃしていて騒々しい（0歳児期妻）

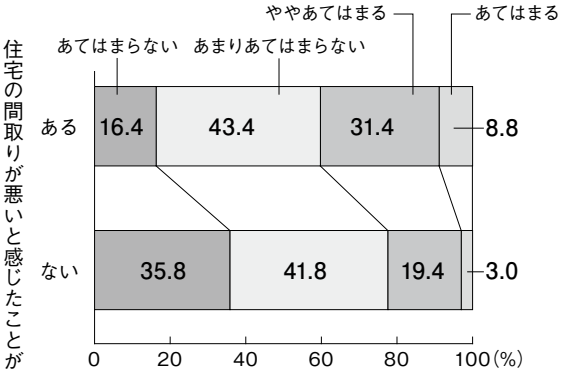


図5−10　家の雰囲気：私たち家族はいつも何かにせかされているような気がする（0歳児期妻）

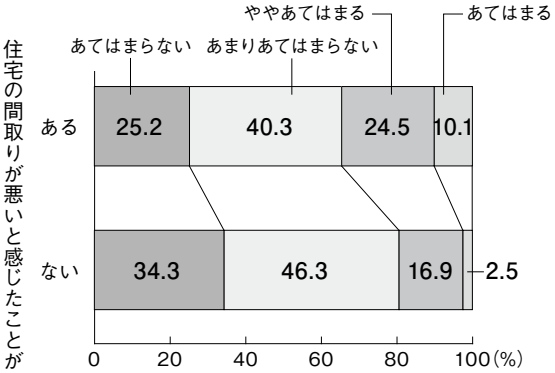


図5−11　家の雰囲気：うちの家族はいつもばたばたしている（0歳児期妻）

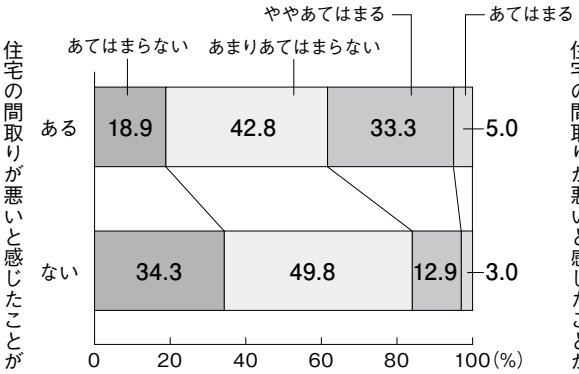
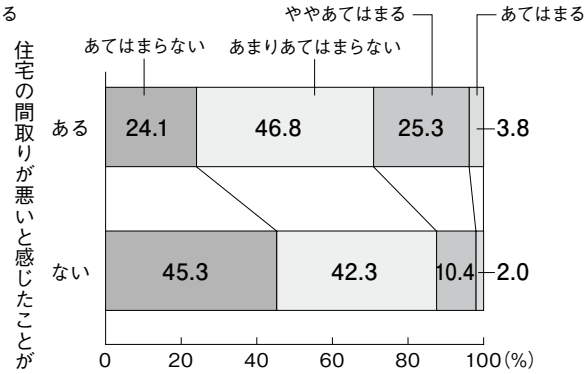


図5−12　家の雰囲気：うちでは邪魔をされずに考えごとをすることができない（0歳児期妻）



注1）図5−9〜12の「無答不明」は除く。
注2）図5−8〜12は、「0歳児用」の調査項目を使用。項目の詳細は、ベネッセ次世代育成研究所の公開HPに掲載。